

私は、既に存在しているものを素材として扱っている。

それはネット上に無数に漂っている 3D データや画像であったり、AI によって条件的にかき集められた過去の集積であったりする。

どちらも、私がゼロから設計したものではない。

それらを拾い集め、組み替え、配置し直す中で、私自身の存在と向き合う態度が、自然と形作られていく。

今回の映像作品では、自作した仮想アバターのダンス映像や、プロンプトから生成された架空のアバターによる身体表現をもとに、AI がそれらをリミックスし、複数の映像的変奏を生成している。

これらは単一の起点から枝分かれするような構造を持ち、似て非なる身体のあり方や時間の進行を提示する。

そこに浮かび上がるのは、単なる映像のバリエーションではなく、“分裂していく存在” そのものである。

そこにどこか違和感を覚えながらも、見事に模倣された人間の動きには、『生きている』と錯覚させるような気配が漂っていることに気づいた。

そもそも私は、日常的にソーシャル VR アプリ（アバターを介してネット上でコミュニケーションを取るサービス）を利用している。そこでは、多様な姿をした素性の知れない存在たちが目の前に現れるが、彼らの表面の奥に本当に生身の人間のような息遣いがあるのか、確信が持てなくなることがある。

重要なのは、AI による模倣であれ、選択可能な簡略化された身体を介したやりとりであれ、それがあまりにもリアルに感じられるとき、その存在との対話の限界がそこにあるのではないかということだ。

もしかすると、そうした生物の気配のようなもの、いわば『魂のような何か』は、今後、授かるものや宿るものではなく、外側から『あると感じるかどうか』によってのみ成立し、条件さえ揃えば発生する現象のようなものになるのではないだろうか。そして、それは無限に複製され、拡散していくことができる。

別の作品群では、仮想空間上で再構成した構造物を上下左右前後の六方向からレンダリングし、それぞれを異なる在り方として出力している。

それらは視点によって分割された断片でありながら、すべてが合わさることで初めてひとつの像として存在を保っている。

ひとつの存在を六つの異なる視野に解体しながらも、その分割が別のかたちで存在感を強めていくように感じている。これらの系列の作品は、形式も質感も異なりながら、『複製可能な既存の記録』を扱っている点で互いに接続している。そして私は、そうした複製の中にこそ、現代におけるアウラのようなものが立ち上がる瞬間があるのではないかと考えている。

一回性によって担保されていたはずの“気配” が、むしろ複製や再構成の中から立ち現れてくる。

それは、本来失われているはずのものが、何か別の条件のもとで再び出現するような、不安定な現象である。

「6」 という数字に私は以前から惹かれている。

立体の全体像を捉えるための構成としての六方向、そしてクォークやレプトンといった素粒子が 6 種ずつ存在するという事実。

どちらも世界のかたちを支えるフレームでありながら、直感的な確からしさのようなものをも含んでいる。

私にとって「6 面から見る」という方法は、構造的というよりも、存在をとらえるための身体的感覚に近い。

私は、『本物らしさ』や『魂の所在』といった言葉に強く惹かれながらも、それがどこにあるのかを断定することはできない。

像が複製され、分裂し、再構成されるプロセスそのものの中で、存在の震えが立ち上がってくるのを見ている。その瞬間こそが、私にとっての作品である。

虚ろな存在たちは自らが映り込んでいく鏡を見る。

平田 尚也



会期 | 2025 年 5 月 28 日 (水) - 6 月 29 日 (日)
平日 | 11:00 - 19:00 日・祝日 | 11:00 - 18:00
毎週月曜休 (月曜日が祝日にあたる場合も休廊)
主催 | 株式会社 資生堂

仮現の反射 Reflections of Bric-a-Brac

平田 尚也
Naoya Hirata

「shiseido art egg」は、資生堂が新進アーティストを応援する公募プログラムで、人びとの感性と多様な価値観を刺激し、新たな美の可能性を押し広げるアーティストに個展開催の機会を提供するものです。2006 年にスタートして以来、延べ 51 名(組)の入選アーティストが個展を開催、その後も活躍の幅を広げています。

第 3 期に展示する平田 尚也は、デジタルテクノロジーの急速な進化と仮想化が進む現代において、私たちの身体や存在をめぐる問いに向き合います。

最近では、特に VRSNS(ソーシャル VR)の普及により、私たちの日常生活においてオンラインとオフラインの境界がますます無効になりつつあります。VRSNS に登場するアバターは、単なる仮の姿ではなく、VR 空間内で周囲の環境や他者と相互作用しながら、自らの表面を飾り立て主張しあう存在です。これらのアバターは、生身の人間の意志や思考、感情を反映し、精神の所在を示す鏡のようでもあります。

平田は、インターネット上のパブリックドメインに蓄積された歴史的な彫刻や構造物のデジタルデータを再構成し、レンダリングや 3D プリント技術を用いて可視化します。このプロセスを通じて、デジタル文化における複製の意味を問い直し、再び物質化することによってその気配を探索します。展示空間に横たえるこれらのオブジェクトは、従来の明瞭で硬い形状を持った彫刻とは異なり、流動的に変化しやすく、時空を超えて共存する存在として現れます。ざわめく虚ろな存在たちは、何を見つめているのでしょうか。

平田 尚也

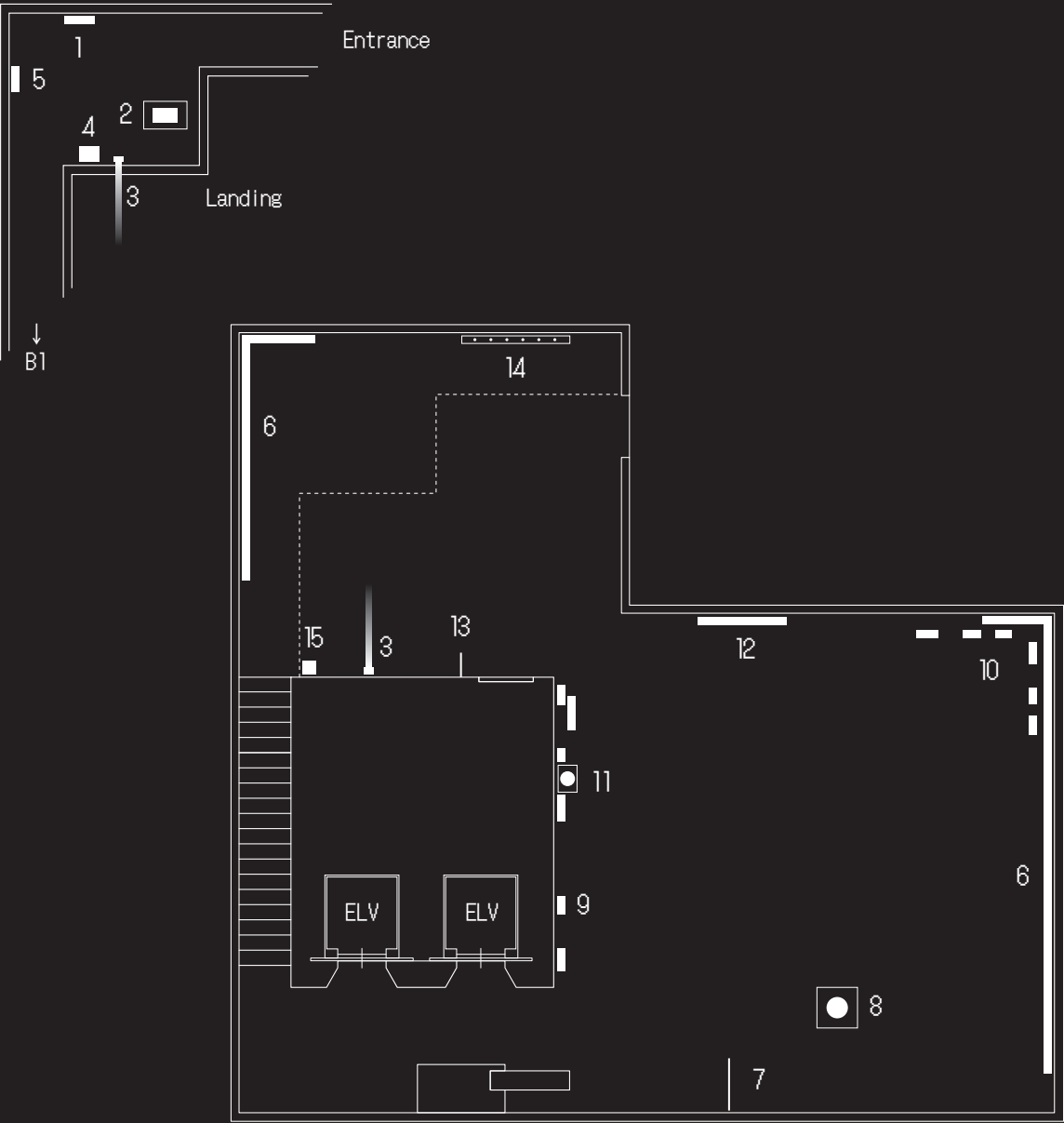
1991 年 長野県生まれ
2014 年 武蔵野美術大学造形学部彫刻学科卒業
埼玉県在住

主な活動
2024 年 「Moonlit night horn」Satoko Oe Contemporary、東京
2021 年 「さかしま」Satoko Oe Contemporary、東京

SHISEIDO GALLERY



Floormap



- 1

Six-fold Multi-Substance (Branch)

2025

420 x 350 mm

レンチキュラーシート
- 2

十把一絡げ #5 (beak)

2025

540 x 380 x 290 mm

PLA プラスチック
- 3

如意棒 (Pirate and Torches)

2025

サイズ可変

フォトポリマーレジン
- 4

Bogus Romance #15 (woodland rhapsody)

2022

306 x 517 x 114 mm

レジン
- 5

Bermuda Swimming

2022

HD ビデオ

4分 41秒
- 6

Sneaky Skins in a Dispersion of Agency

2025

2チャンネルHDビデオ

6分7秒
- 7

如意棒 (Actaeon Lady Soldier)

2025

サイズ可変

フォトポリマーレジン
- 8

十把一絡げ #4 (shell flute)

2025

450 x 1000 x 320 mm

PLA プラスチック
- 9

Six-fold Double (Wolf and Rat)

2025

サイズ可変

アルミ複合板

- 10

Six-fold Double (Backpack and Neptune)

2025

サイズ可変

アルミ複合板
- 11

十把一絡げ #3 (Piper)

2025

450 x 720 x 370 mm

PLA プラスチック
- 12

Faraway Bodies (Chimera, Adventurer, Oddball, Demon, Satyr, Elf)

2025

サイズ可変

ポリエステルスエード
- 13

如意棒 (Washing Machine and Two Stones)

2025

サイズ可変

フォトポリマーレジン
- 14

Skin-Changer Branch (Magic Carpet)

2025

193 x 46 x 100 mm

フルカラーマルチマテリアル
- Skin-Changer Branch (Kabuki Face)

2025

300 x 30 x 63 mm

フルカラーマルチマテリアル
- Skin-Changer Branch (Flower Field)

2025

289 x 31 x 39 mm

フルカラーマルチマテリアル
- Skin-Changer Branch (My Toast)

2025

257 x 35 x 44 mm

フルカラーマルチマテリアル
- Skin-Changer Branch (HD 189733b)

2025

198 x 36 x 30 mm

フルカラーマルチマテリアル

- Skin-Changer Branch (Wailing)

2025

196 x 37 x 80 mm

フルカラーマルチマテリアル
- 15

Stone recollection (Mercury)

2025

23 x 30 x 15 mm

真鍮にK24 メッキ